

オルテガ・イ・ガセット著「大学の使命」を読む

- だらしなさ、ずさんさからの訣別を考える -

そういう気まま・締めりなさが——たとえば、「とにかくやろうじゃないか」、「どっちでもいいよ」、「まあその辺のところだ」、「それがどうしたというのだ」などと、諸君のよくいうそれが、すなわちだらしなさ、ぞんざいさというものです。

個人の場合と同様に、集団にあってもまた、好調でも不調でもありえます。歴史が明示しているように、何事であれそれを成し遂げたのは、フォームに成功したグループでした。それらのグループは、緊密に、完全に組織化されており、いざというときになって期待に背いたり裏切ったりする者は一人もいないということを、メンバーの各人がよく知り合っています。ですから、全組織体のバランスを崩すことなく、その先頭を見失うことなく、いずれの方向へでも速やかに動くことができたのです。 P.84

いかなるグループといえども、みずからを鍛錬し、鍛錬しつづけるのでなければ、また、なそうと目指していることを十分明瞭に見通しているのでなければ、そうしたフォームを獲得することはできません。なおまた、その見通している目的が十分に考え抜かれていて、切実に人をうなずかせるほど明白であり、かつ、状況がそれを保証しているといつてよいほどに完全なものでなければ、明瞭に見抜くということはできません。 P.85

大衆(マス)に影響を及ぼしうるためには、諸君は単なる集まり(マス)以上のあるものであらねばならない。すなわち、生きた力、換言すれば、好調のグループでなければならない。 P.86

実際、歴史はしばしば飛躍によって前進します。大きな隔たりが埋められるこれらの歴史的飛躍を、われわれは世代と呼んでいます。好調の一代は、不調のゆえに幾世紀も失敗してきたことを成就することができるのです。若き諸君、挑戦がなされるのはまさにそのときであります。 P.87

オルテガ・イ・ガセット著「大学の使命」玉川大学出版部 1996年2月25日刊

- 2006年10月14日記 -